島根の記憶 ⑥

大橋川の四つ手網漁

絶えた水辺の風物詩

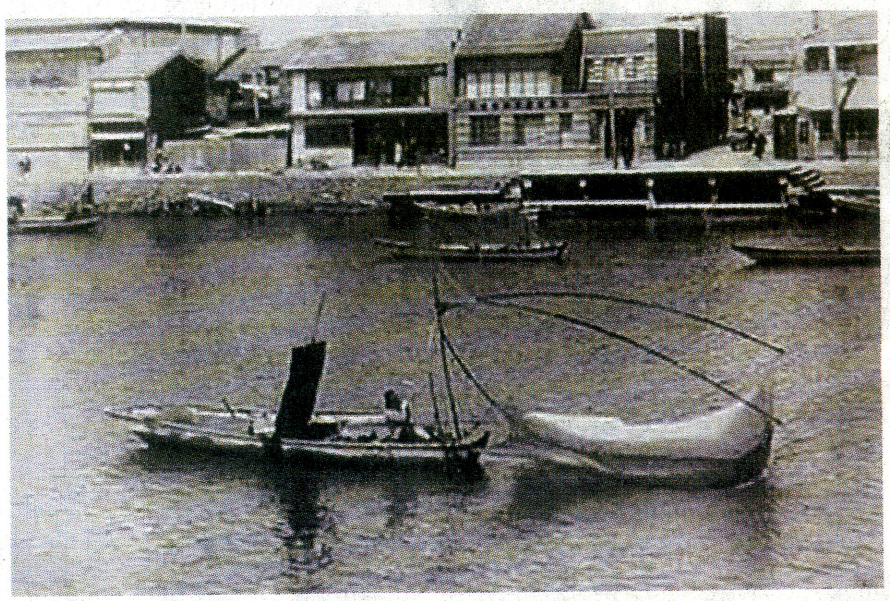
畳んだ四つ手網を持つ佐々木さん（県立宍道湖自然館ゴビウスで）

「これですよ」。平田市園町の県立宍道湖自然館ゴビウスで飼育展示係を務める佐々木興さん(36)が、大切にしまっている〈幻の漁網〉を見せてくれた。網目は縦横一㌢弱、広げると約四・五㍍四方になる。大橋川や宍道湖で一九六〇年代ごろまで使われていた四つ手網だ。

十字に組んだ竹の先に四隅を結び、持ち上げて船尾に固定。魚やエビの通り道に船を止め、大きなざるのように水面に浸けてすくい獲る。同館が一昨年末に特別展「宍道湖・中海の漁具、漁法」を開いた際「もう使わないが、昔、こんな網もあった」と松江市東本町三の飯塚信喜さん(73)が寄贈した。

「これはシラウオ漁ですね。春先、中海から宍道湖へ、下げ潮を上がって来るところを狙う。帆のようなものは風よけですかな？　岸辺には定置網らしきものも見えますねえ」

写真の光景を飯塚さんが解説してくれた。父勝行さんは、大正時代から自転車店を営む一方、客足の減る冬から早春にかけ、旬のシラウオを四つ手網で取った。



四つ手網を使った大橋川での漁（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）

数分おきに網を引き揚げ、中央にたまった魚をすくう。秋には、同じ宍道湖七珍の一つ、モロゲエビを狙った。夜、船尾に下げた松明が川面に映え、格別の風情を醸したという。しかし、漁獲が減ったこともあり、五〇年過ぎにやめた。

「漁法が原始的ですわねえ、定置網のように一網打尽にはいかない。それに、網を引き揚げる回数が一度の漁で何百回にもなる重労働。本業は別に持っている人が多かったと思う。昭和初期から終戦直後までが全盛期でしょうねえ」。飯塚さんはそう振り返る。

現在、漁は冬場が中心。宍道湖観光遊覧船が行き交う

松江大橋　四つ手の網に

白魚いとしやすくはれる
魚いとしや四つ手の網に
わたしゃあなたにすくはれる

詩人の生田春月もそう詠った水辺の風物詩が、宍道湖周辺で絶えて久しい。